長崎大学看護学同窓会会員の進路に関する調査　第2報
―専門看護師・認定看護師に関する意識調査―

宮下　弘子[1]・片穂野邦子[1]

要　旨　平成8年度より認定を開始した専門看護師・認定看護師について，長崎大学看護学同窓会会員がどのような認識をもっているか調査を行った．対象は昭和33年度以降に卒業した長崎大学看護学同窓会会員のうち看護職としての就職経験のある732名とし，637名の有効回答を得た．認定について知っていたものは324名（50.9%）であったが，施設就業者に限ってみると238名（72.6%）であった．自身に認定を受ける意志があると回答したものは64名（19.8%）であった．必要性については273名（84.3%）が必要と答えていた．専門看護師・認定看護師についての意見では役割への期待を述べたものが147名，導入にあたっての条件及び課題についてが54名，否定的意見が20名あった．

長崎大医療技短大紀 12: 61-63, 1998

Key Words　:　意識調査，専門看護師，認定看護師

はじめに

昭和62年7月，日本看護協会において「専門看護婦（士）制度検討委員会」が発足し，専門看護婦制度の在り方についての本格的な検討が始まった．そして平成8年5月，6人の看護職が専門看護師として認定され，ついで平成8年10月より看護教育・研修センター内に認定看護師教育課程が設置され，救急看護と創傷・オストミー・失禁（WOC）看護の2コースが開講した[1]．

専門看護師・認定看護師誕生の背景には，社会のニーズの多様化にともない，それに対応できる力量をもつ看護職が必要とされるようになったことが大きな要因としてあげられる．しかしながら認定がはじまって未だ日が浅いこと，認定を受けた絶対数が少ないことなどから，専門看護師がどのように活用され，看護ケアや管理上どのような影響や変化が認知されたかなど充分に周知されるに至ってはいない．このような背景をふまえ，導入後2年目を迎えた専門看護師・認定看護師について長崎看護学同窓会会員がどのような認識をもっているかについて調査を行った．

1．対象および方法

対象は長崎大学看護学同窓会会員のうち同窓会名簿で消息の明らかな者とし，長崎大学医学部附属看護学校第9回～第36回卒業生748名，長崎大学医療技術短期大学部看護学科第1回～第12回卒業生のうち看護職としての就職経験のある567名とした．

調査方法は郵送によるアンケート調査を行い，無記名回答とした．調査内容は専門看護師・認定看護師について，①知っているか，②自身が認定をうける意志があるか，またある場合には希望する分野，③専門看護師・認定看護師の必要性，④専門看護師・認定看護師についての意見とした．調査結果は回答者の背景別に比較するとともに，④については自由記載された内容を類似しした性質ごとに分類し，カテゴリー化した．

2．結果および考察

質問紙の回収状況，回答者の背景は第1報と同様である．

1）専門看護師・認定看護師の認知

平成8年度より専門看護師・認定看護師の認定が日本看護協会により行われるようになったことについて，知っているかどうか質問した．回答者637名中「知っている」と答えたものは324名（50.9%）であった．これを卒業年代別にみるために，看護学校第9回～第22回卒業生（以下第1期群とする）と第23回～第36回卒業生（以下第2期群とする），医療短期大学部卒業生（以下第3期群とする）に分けて比較した．第1期群では235名中111名（47.2%）が，第2期群では159名中85名（53.5%）が，第3期群では243名中128名（52.7%）が知っていると回答しており，卒業年代別に有意差はみられなかった．また施設就業者328名についてみると，「知っている」と答えた者は238名（72.6%）であった．これを管理職者とスタッフの別でみると，管理職者では114名中93名（86.7%），スタッフナースでは214名中145名（67.8%）であった．

岡谷ら[2]が，総合病院及びがん専門病院に勤務する看護職者を対象に行った調査では，専門看護師制度について知っていると答えたものは全体の72.5%と報告している．今回の我々の結果では全体としては50.9%であったが，施設就業者に限ってみるとほぼ同様の結果であった．

1　長崎大学医療技術短期大学部看護学科

これは施設就業者以外では情報の流通が不足するためと思われる．

2）認定を受ける意志の有無

専門看護師・認定看護師制度について知っていると答えたものに対して，自身に認定を受ける意志があるかどうかを質問した．受ける意志があると答えたものは324名中64名（19.8%）であった．卒業年代別にみると第1期群が 111名中10名（9.0%），第2期群が85名中18名（21.2%），第3期群が128名中36名（28.1%）であり，第1期群に若干低い傾向がみられた．これは第1期群の年齢層が40代後半に入っており，すでに管理職についていたり，自分がというよりも後進を育てる世代にはいっていることも関連していると思われる．

認定を受ける意志があると答えたもののうち，具体的に分野を特定したものは45名おり，その内訳は専門看護師の分野ではがん看護12名，精神看護6名，地域看護8名，認定看護師の分野では救急看護11名，創傷・オストミー・失禁（WOC）看護8名であった．今回の調査対象ではいずれの分野もほぼ同等のニードがあることが示された．

3）専門看護師・認定看護師の必要性

専門看護師・認定看護師が必要と考えるかどうかについての回答では，「必要」と答えたものが324名中273名（84.3%）であった．卒業年代別比較では，第1期群が111名中88名（79.3%），第2期群が85名中66名（77.6%），第3期群が128名中119名（93.0%）であり，各群間に有意差はみられなかった．

4）専門看護師・認定看護師についての意見

専門看護師・認定看護師について，219名が何らかの意見を記載していた．その内容を岡谷らの手法[2]に準じて類似した性質ごとに分類し，カテゴリー化した．

まず専門看護師・認定看護師への役割期待を表1に示す．専門看護師・認定看護師への役割期待として，看護実践では「よりよい看護・患者サービスの提供」，「看護の質の向上」が多くあげられていた．またスタッフへの効果として「看護婦全体のレベルアップ」，社会的影響として「専門性の明確化，専門職としての確立」，「看護婦の社会的地位の向上」を期待するものが多かった．

次に導入にあたっての条件および課題について表2に示す．専門看護師・認定看護師を導入するにあたっての

表1．専門看護師・認定看護師への役割期待

看護実践	よりよい看護・患者サービスの提供 （含む・患者のニードへの対応、ＱＯＬの向上） 看護の質の向上 他職種との協調、対等な関係確立 看護の専門性を高める	３７名 ２４名 ９名 ３名
スタッフへの効果	看護婦全体のレベルアップ（スタッフ指導・教育を含む） 看護婦の意識・意欲の向上 自信を持って仕事ができる	１７名 ７名 ４名
資質	深い専門知識を有する リーダーシップ 医師と看護婦の中間的立場で役立つ責任ある存在	８名 ２名 １名
社会的影響	専門性の明確化、専門職としての確立 看護婦の社会的地位の向上 看護研究・教育・看護学の体系化に必要	２２名 １９名 １名

表2．導入にあたっての条件および課題

処遇	活躍の場の確保 活動内容の明確化、他のスタッフとの役割分担 身分保障 給与 ローテーション制度との両立 看護部のバックアップ、管理者による人選・育成	８名 ８名 ５名 ３名 ３名 ２名
認定の在り方	受講しやすい条件を 分野を増やして 生涯資格でなく更新制度を	６名 ２名 １名
資質	全般的な経験を積んだ後に 師としての責任の重大さに対応できる力量、知識を 看護の原点を見失わないで 地域社会で認められる人に	６名 ３名 ２名 １名
専門・認定看護師の存在のＰＲを		４名

表3． 否定的意見

専門化することのデメリット	6名
知識が偏ってしまう	2名
全人的把握ができなくなる	1名
人間性や人の心が置き忘れられそう	1名
基本的な看護がおろそかになる	1名
学問ができても現場できちんと仕事ができない看護婦は不要	1名
看護婦のランクづけになってしまう	3名
現在の現場では専門性を発揮できない	3名
資格のメリット、立場、機能が不明確	2名
地域の一般病院では不要	2名
給料、地位の向上に直接つながらない	2名
国の認定にならないと社会的に通用しない	1名
認定しても個人の利にしかならない。	1名

条件および課題としては処遇に関して述べているものが多く，その内訳は「活動の場の確保」,「活動内容の明確化，他のスタッフとの役割分担」,「身分保障」,「給与」などであった．また認定の在り方については，中央だけでなく地方でも開催するなど「受講しやすい条件」を求めるものが多く，資質に関してはジェネラリストとして「全般的な経験を積んだ後に」認定を受けてほしいとする声も多かった．

表3に「否定的意見」を示す．否定的意見を記載したものでは，専門化することのデメリットとしては偏った知識や関わりになることがあげられており，その他には「看護婦のランクづけにつながる」,「現在の現場では専門性を発揮できない」ことなどへの危惧があげられていた．

その他の意見としては「社会環境の変化」や「医療制度の変化にともなう分野・場の拡大」など，専門・認定看護師を必要とする社会背景についてあげているものが16名あったほか,「自分の力を試すチャンス」,「転職時に有利」など個人的意義を述べているものも少数みられた．

今回の調査は，専門看護師と認定看護師は特に区別をせずに設問した．いずれも全人的に看ることにおいては相違ないはずであるが，否定的意見の中には「偏った知識や関わりになる」と危惧する意見が散見された．専門化＝部分化ととらえられているような印象を受けた．これはひとつには専門・認定看護師が実際に働いている場面にまだ遭遇するチャンスがない人々が多い現状を反映しているものと思われる．一般の人々も含め，対社会的に専門・認定看護師の活動内容を広く知らせていくことも今後の課題と考える．

謝　辞

今回の調査を行うにあたり，同窓会名簿を提供してくださいました長崎大学看護学同窓会会長久松シソノ様はじめ，調査にご協力くださいました同窓会会員の皆様に心より感謝申し上げます．

文　献

1．鈴木文江：専門看護師・認定看護師制度の歴史的経緯，看護　48:34-41, 1996.
2．岡谷恵子，鈴木文江，富律子，佐藤直子：専門看護師導入に関する看護職のニーズ調査，看護　48:155-173, 1996.